

# THE KANSAI UNIVERSITY NEWS

第115号

# 関西大学通信

関西大学広報委員会  
大阪府吹田市山手町3丁目



ピーター・ブリューゲル「雪景色の中の獵師たち」(1565年、油彩板絵 117cm×162cm、ウィーン 美術史美術館蔵)

ピーター・ブリューゲル（一五二五以降—一五六九年）は、アントワープおよびブリュッセルで活躍したネーデルラントの画家である。初めは銅版画の下絵画家として製作したが、画家としては、宗教画のほかに、風景、農民生活、俗謡などを主題とした新しい世俗的ジャンルの傑作を残した。彼は若い日にイタリアに旅行したが、その時に持ち帰った素描の成果から推定すれば、当時の彼は風景の研究に熱中していて、イタリア・ルネッサンスの巨匠たちの人物構図の複写をした痕跡は全く残していないと言えるのである。十七世紀初めにネーデルラントの美術家列伝を著した方レル・ファン・マンデルによると、彼はアルプスを越えた時に、その山々を「春み込み、帰国してからそれを板絵の上に『吐き出した』」と記されている。これは勿論比喩的な言回であるが、山岳や渓谷などの地勢構成要素、水流と湖沼、植物と人物・動物添景、またそれらの光と天気による気象的な変化などの多種多様な風景モチーフは、彼の記憶の中に保持されていて、それらが糾合されることで、驚くべき繊まりをもつ大自然のイメージとして、下絵となる素描も必要とせずに、画面に定着されいくことになったと理解されるのである。事實彼の風景画は、地誌学的に正確な描写ではない。アルプスの山岳とオランダの渓谷や風物を混成して、ユニークアーチカルな自然の形姿を想像力によって創造しているのである。とはいえ、ネーデルラントにおける先輩であるヨアヒム・ベティニールたちのノーラニックな風景画に見られる、諸細部の結合の恣意的で脆弱な印象は、生動的で総合的な視線構成を伴う広大な空間展開の実現によって克服されている。

ところで、ブリューゲルの円熟期のこの雪景色の絵は、実は「十二箇月（月曆）」という連作に所属する作品であった。この連作主題は、かつてゴシック大聖堂の装飾浮彫において、月々に特有の労働に励む農民の人物像描写によって寓意的表现を与えていたものであったが、十五世紀の写本の彩飾挿絵においては、農民の生活情景を風景舞台の中に展開する描写が始められ、次いで風景が人物を完全に包摂する空間的原理として扱われるに至ったのが、ブリューゲルの連作の位置する歴史的段階である。彼の連作はこうした主題性を含むという点では純粋な自然観照に基づく「風景画」とは言えないにしても、却ってそれ故に、星晨の運行とともに変化していく自然の相貌と人間生活との一大田園交響詩を奏でることができたのである。この連作が元来十二点あったが六点であったかについては議論の決着はついていないが、それが王公や聖職者の注文作ではなく、ニコラス・ヨンゲリングという市民的な富豪の邸宅の壁面を飾るためのものであったことは確認されている。この雪景色を十一月ないし一月の描写と見るとするなら、二月ないし三月に当たる「暗い日」と十月ないし十一月に当たる牧草地から帰る牛の群は同じヴィーンの美術史美術館にあり、五月ないし六月に当たる「干草つくり」はオーバーの国立美術館、未だ八月の「麦刈り」はニューヨークのメトロポリタン美術館にあり、総計五点が現存しているということになる。雪景色の絵は、その右方向に開けた構図からして、壁面に飾られる連作の最初の画面として、左端に配置されたものであるだろう。それそれの画面を通して見ると、広大な自然は、その相貌の変化を、特に地形構成や色彩配置によって明示するとともに、また人々の生活形態や氣分と季条件づけ支配する包括者の存在であることを強く印象づけるのである。中世美術において、神の姿として神聖な理念の象徴として用いられた人物像は、こうして大自然の空間と時間の法則の中に織込まれることになった。さて、この絵画の前に立つ時、鑑賞者が第一印象として受け取るのは、凜然たる寒氣の滲透、運動の自由を拘束する凍え、鳥の止まる枯木に見られる凋落的印象、山岳の陥没感など、まさに「冬」のむろ々とした氣分と見るものであるが、しかしその厳しい自然真美は、微妙な変化を伴う白・緑・褐色のグラットな色面の巻き合いの詩的効果によって、芸術的に宥和されている。そしてまた活気のある小さな対照モチーフも豊かである。前景において困難な歩行姿勢で黙々として雪を踏んで行く無師たちの、暗示的な肉付けをもつて見出されるであろう。一方、枯木の列が途絶えるところでは、歎声がかすかに伝わって来るようであるし、空と天地の交わるところを十字型をして飛行する鳥、「鷹亭」とでもいった宿屋の前で焚火をして豚の毛焼きをする人々、前縦中央部の灌木の枝のしならかな曲線などのことである。生命はコントラストに満ちているのである。

そしてまた、窓枠を通して眺められるような自然の一断片を扱う近代の風景画を見慣れた鑑賞者は、この風景空間の拡がりと深さの宇宙的とも言ふべき無窮性の印象に一驚することであろう。兎一匹という乏しい獲物を担つて帰る獵師たちと行き従う大たちのケループは、總体としていわば船を引くドミッド型とでもいつた落ち着きのある構成をもつて、その前進方向は、右上がりに次第に短縮されていく黒い枯木の列と相俟つて、主要な空間的動勢を画面の中に生じさせる。そして、前景の雪で覆われた丘の右下がりの斜線は、これと交差して画面の平面構成上のバランスを保証する。さらに、枯木が示す垂直線に対応する水平線モチーフも灌木や地平線において見出されるであろう。一方、枯木の列が途絶えるところでは、歎声がかすかに伝わって来るようであるし、空と天地の交わるところを十字型をして飛行する

そしてまた、怒鷲を通して眺められるような自然の一断片を扱う近代の風景画を見慣れた鑑賞者は、「この風景空間の拡がりと深さの宇宙的とも言うべき無窮性の印象に」驚くことであろう。兎一匹といっしい獲物を担つて帰る獵師たちと付き従つた大たちのグルーフは、總体としていわば櫛を引くビラミッド型ともいつた落ち書きのある構成をもつ。その前進方向は、右上がりに次第に短縮されていく黒い枯木の列と相俟つて、主要な空間的動勢を画面の中に生じさせる。そして、前景の雪で覆われた丘の石下がりの斜縫は、これと交差して画面の平面構成上のバランスを保証する。さらに、枯木が不す垂直線に対応する水平線モチーフも溜溝や地平線において見出されるのである。一方、枯木の列が途絶えるところでは、既述の空間的動勢を幾分緩和された形で受継ぐことになる道路の斜縫があり、荷車を引く二頭の馬、教会のある村落を経て、遠景の水墨画にも似た険しい山岳へと、目は導かれる。だがその過程においてこの方向と交差する斜縫と、氷結した河の蛇行線モチーフによって、私たちの目は、また、青みがかつた最も厳しい寒気を示す遠山とその左方の仄かに明るい湖水へと誘われていく。

ブリューゲルの空間はまだ視線の合成という点で、心理的な力動性を持つていて、視点は鳥瞰図的に高く取られているが、しかし空と大地を結ぶ枯木の梢は仰き見られ、前景の丘に覆われた低地は切り立つ崖の上から覗き見られる。

さらにその他の細部にも、興味深い冬の風物詩が見出されることである。右端の氷結じごつの下で停まっている水車、赤いスカートの女の妻の櫻新を担つて櫛を渡る女。中景の雪野原の中では、射撃する男とその音に驚いて飛立つ鳥たち、暖炉の過熱のための火事と梯子をかけての消火活動、またそれに助勢するために駆けぐら駆せ付ける人々。遠景の湖の畔の上には小さな町があり、湖上にはマストのある船や、凍結した湖上を馬籠で荷物運搬する人の姿も見られる。

風彩について一言述べるなら、細密な厚塗りは避け、かなり大きな筆触で下塗りの効果を生かす透明油彩の技法が幅広く用いられ、それによって微妙な色相、明度の差が生じている。しかし、總体として強い色度を欠く、白・緑・褐色面のアンサンブルで、「晩秋」の絵に見られる雰囲のボリフォニーを響かせ、また大型人物の動勢が大自然のそれと調和している」と相俟つて、まさに冬の凍結と静寂さの中に、莊重な諧和音を鳴り響かせることになっているのである。

西村規矩夫







